『エミール』に現れた表象としてのロビンソンの「島」

熊本 哲也

第1章 ジャン＝ジャックはロビンソンの夢をみるか

ルソーの本嫌いというのは、例えばその自伝の中で述べられているようにとくに知られているが、特に『エミール』は、「私は書物を憎んでいる。書物は知らないことについての話し方しか教えないものだ」と述べ、書物が、何かしら災いをもたらす危険な存在であることを示唆している。そのことはまた同時に、ルソー自身、この種の宣言をやはり書物を通じて表明せざるを得ないかゆえに、この発言内容は、精神分析学的意味での「否認」行為であると読むに推奨させずにほかならない。つまり、ある事柄の存在の否認は存在の肯定を前提にしているのである。

この種の「否認」の態度は、書物を自らに適さない「表象」を用いる教育手段であるとしてルソーが批判する一節を題する際、多くのルソー読者・研究者はルソーの言語論や政治社会論を思い起こすことだろう。というのは、「表象」（représentation）は、同時に「代理」「代行」を意味し、事物そのものに対して直接に現れるいない間接的な媒介物としてルソーによって批判されるが、他方ですぐれた補完的役割を果たすものとして評価されるからである。それは、『言語起源論』におけるエクリチュール（書き言葉）への批判とその代補作用（supplément）の評価であるとか、或いは『社会契約論』に提起されてい るように、人民の意志を「代行」（représenter）する代議制政治自体を批判するが、共同体そのものが権利を全面的譲渡するべき共同体そのものが人民の意志を代行しうる、といったような代理表象するものに対す るルソーの両義的態度なのである。ルソーにおける表象の否認は、従って表象自体の絶対的否定や排除を意味しているのではなく、そのように形容される諸対象の内になんらかの解決策を滑り込むための、いわば思春期の意味がある。このような前提で、『エミール』の第三編の内に次のように述べられている表象を用いた教育手段への批判的文章を読む際、われわれはその「否認」的な意味を理解するべきなのである。

あなたはこの子供に地理を教えようとして、地球儀や天球儀や地図を探しに行のだろう。なんで多くのに具だ ろう。なぜすべてこうした表象（toutes ces représentations）を使うのだろうか。（p.430）

一般的に、それを見せることができない限り事物を記号（signe）に置き換えてはならない。というのも、記号 は子供の注意力を引きつけるので表現された事物（la chose représentée）を忘れさせるからである。（p.434）

案の定というべきか、『エミール』は、こうした書物＝表象批判を行いながら、同時に、そうした書物の なかに一つ例外があると主張するのである。それこそが本論でとりあげてゆくダニエル・デフォーの小説 『ロビンソン・クルーダー』である。

本論において、われわれは小説『ロビンソン・クルーダー』という書物に対して、ルソーが示す二つの態 度を中心に議論してゆきたい。その一つは、『エミール』において指摘されている上記のような教育論的
な一見解である。すなわち、『ロビンソン・クルーソー』は、教育論上、自然哲学の書として子供に読まれるべき最初の書物であるという主張である。この解読は単に教育論であるだけでなく、広くルソーの社会・歴史哲学論や当時の時代の思想と関連している。周知のように18世紀フランス文学・思想において、「島」という場が舞台となる作品は数多く有名なところでは、18世紀前半のマリーヌの『奴隷の島』(1725)、『理性の島』(1727) や、ブレヴァーの『クリークダウン』(1729-1739) の島があり、後半にはディドロの『プーガンディール航海記補遺』(1780)、サドの『アリスとヴァルクール』(1785-1788)、ベルナルダン・ドゥ＝サン＝ピエールの『ボールとヴォルジニー』(1788) が文学史上に登場している。これらの「島」のトポスは、現実秩序を転倒する虚構の場としての傾向を持っている、ということが中川久定によって既に指摘されている。われわれは、ルソーの「島」をこうした文学・思想史の文脈、或いはルソー的科学哲学の文脈に位置づけたそのトポスのあり方を論じてゆく。

第二の点は、ルソー自身の個人的心理において、しばしばロビンソンに自己同一化したいという願望がみられるということである。ルソーは、このように小説の主人公ロビンソンが暮らすような孤島という環境に強い個人的傾向を示しているのである。ルソーの「島」はルソー一人の心の領域に願望という形で深く関与している。この願望は「島嶼性願望」(désir d'insularité) または「島の偏執」(manie insulaire) などと呼ばれ、ルソーにみられる閉ざされた領域への執着のひとつのとして関連づけられている。こうした広い意味での心理学的観点から見た「島」という問題も、ルソーによっての「島」のトポスの本質を捉えるうえで欠かせない視座である。

ルソーによる「島」の表象を捉える際に、われわれは以下の様々な二つの補助線を引いたうえで、その交点に現れるであろう多層的な表象としての「島」を捉えてゆこうと思う。その際、重要なのはこの『ロビンソン・クルーソー』という小説そのものである。この奇妙さは、そして途方もない影響力を持った小説を読み解くことは、ルソーの「島」の道解の導きの糸となるだろう。

まず、最初にこの小説とルソーとの歴史的関わりについて触れておく。この小説は、1719年、イギリス人ダニエル・デフォーによって『ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険』という題名で発表されたが、当時としては未曾有の成功を博し、第二部、第三部と続編が書き続けられてゆく。ルソーはこの書物を、1721年以降に出版されたフランス語訳で読んでいたという見方が比較的書学者であるG. ビール等によって提起されている。それによると、少年ジャン＝ジャックは、ジェネラーティスに旅小説『ロビンソン・クルーソー』を、冒険小説として、あるいはビアレス小説として読んでいたと述べられている。そして、後年『エミール』を著すと、ルソーは、この小説を教育のための自然哲学の書物として評価することになり、ルソー特有の演出過多とも思える、無体ぶった文体でこの小説を次のように紹介することになる。

書物がどうしても必要と言うのなら、わたしの考えでは、自然教育のもっとも上出来の概念を提供する一冊の書物が存在する。これがエミールの読む最初の書物となるだろう。それのみが長期間、彼の全歳書を構成し、またいつまでも彼の書物で特別の位置をもつことであろう。諸自然科学についての私たちの会話はすべて、この書物の文章に対する注釈でしかないだろう。私たちが進歩し続ける期間中ずっと、私たちの判断力の状態を試してくるであろうし、私たちの趣味がそこなわれにくいполит、これを読むことはつねに私たちの喜びである。では、このすばらしい書物とはなにか。アリストテレスか、ブリニウスか、ピュッフォンか、ちがう。ロビンソン・クルーソーだ。(pp.454-455.)

ルソーの個人的な愛読書は、ここで彼の教育論の一端における重要なファクトを含む書物となり、更にその後の歴史は、ルソーの評価を一種のパネにして、小説『ロビンソン・クルーソー』を重要な教育の書として受け入れてゆくことになる。英文学史家であるM. グリーンによれば、当時この小説とルソー
の下した評価がヨーロッパ世界に広く受け入れられ、その各国に大きな影響を与えていることは文学史上に確認できる事実である。そしてこのような受容の最大の原因は、小説の「実践的価値」にあるとグリーンは述べている。その理由に、当時の、ヨーロッパの人心に蓄而流布していた啓蒙主義は、封建的伝統に基づく政治的、宗教的迷信からの解放を目指す思潮を形成しており、『エミール』における、ロビンソンが「島」において行ういわば「手工業的労働」や実践的活動に対する重視が、当時の読者に歓迎され受け入れられたというのである。では、その『エミール』の解釈は具体的にどのようなものであったのかをみてゆこう。

第2章『エミール』における島のトポス

小説『ロビンソン・クゥルソー』が教育書として紹介されるのは、『エミール』の第三編においてある。そこでこの『エミール』の中心的哲学に、子供の自然なる発達段階を尊重するという人間学がある。人間の諸能力にはその発展のうえでの自然の秩序があり、その秩序の段階に基づいて「エミール」の各章が構築されているのである。『エミール』第三編は、このようなにして、生徒であるエミールが子供から青年へといたる過程期、年齢では12才から15才という時期での教育を論じている。この期間は、著者の述べた用語で言えば、「必要性」(nécessité)の段階、すなわち子供が生存するために必要な自然的欲求の充足に問題となる段階から、主体に外的な事務が、生活上有効であるかどうかを判断する能力を養う「有用性」(utilité)の段階へと移行する時期である。

この段階、自然的欲求を自分で満たすに足るだけの「力」(force)を既に身に付けていると前提されている子供が、外部の事務に働きかける労働の時代であり、具体的に様々な職業を実践的に体験すべき段階であるとされる。ここにおいての教師の役割は、教育を通じて、事物の有用性を判断する知性的能力を子供に開花させることにある。しかしながら、ルソーは人間の判断力の発達過程には、社会から生ずる様々な誤見がその練外要因となると述べ、子供に見合った領野が必要となると考える。ルソーは、かくして、教育のための空間として「円」(circle)、つまり内的な閉域とも言うべき場を指定するのである。

われわれは、かくして、自分の存在に比してごく小さな円に縮小される。しかしそれでもなおこの円は、一人の子供の精神の尺度からみてなんと大きな領域を形成することだろう。（p.428）

ルソーは、子供の環境をいわばこのように括弧にくくり、そこにおいて理想的な教育を行ううと企てていると言えるだろう。こうした定量化の企てには、当時の様々な思想史的状況が反映されていることはいうまでもない。人間の生得知観を否定し、経験的知覚によって、人間はより複雑な結果を獲得してゆくとするJ．ロックの感覚論哲学は、コンディヤックを経て更に先鋭化されフランスへ導入されていった。こうした感覚論は、『エミール』の段階論的教育観そのものに影響を与えていているだけではなく、われわれの述べてきた経験的領野の制限という形で現われている。

では、こうした思想史的状況におけるルソーの独自性はいかなる点にあるのであろうか。それは、『エミール』第一編に提起されているように、教育に適していると考える「田園」という場の発想に顕著にみられると思われる。

私は、エミールを従僕達などの悪党や主人に従う最下層の人々、つまり、それを覆い隠すための軸が子供にとって誘惑的で悪影響を及ぼすようなこうした都市の暗い風俗から切り離して、田園で育てたいと思う。（p.326）
（強調は筆者による）

つまり、田園という、都市社会から子供を離隔し、括弧にうつった自然的、或いは疑似自然的な領域の発
見と措定である。ルソーが引用し、われわれが論じようとするロビンソン・クルーソーの孤島は、こうした意味でまさに外部的となる都市社会から隔離された場所＝トポスの典型であり、ルソーの教育論にとって恰好的な顕著となるわけである。

ところで、「エミール」にはこうした閉鎖を想定する重要な理由がもうひとつあると思われる。それは、人間の欲望の増大を抑制するというルソーの禁欲的な教育原則ともいえるものである。「エミール」の第二編においては、ルソーは自然的欲求（besoin naturel）と欲求（désir）との区別を厳密に行い、本当の幸福を享受するためには、「能力以上の欲望の過剰を減じ」、「力と意志の均衡をおかねばならない（p.304）」と主張している。

あなたの方の子供を惨めな状態にするものにもっとも確実な方法はなんであるのかご存知だろうか。それは、子供にすべてを手に入れられることを習慣づけることである。のといえども、欲望を満たすことが容易になると、欲は絶え間なく増大し、遂に早かれ、あなた方はそれを拒絶せざるをえなくなるだろうが、子供がこの拒絶に慣れていない場合、彼が望むものを取り上げるよりも以上の苦痛を子供に与えることになるだろう。（p.314）

このような見解は次の戒めとして結論され、ルソーにおける欲望と自然的欲求とを峻別する思想を明示するものとなっている。「子供がそれを要求する（demande）という理由では、なにものも同意してもはいけない。同意するのは、それを必要（besoin）とする理由からなのだ。」（p.311）つまり、ルソーによれば、人間の欲望は際限なく増大する本質を持っているのであるが、他方、欲求は自己充足を目的とする限り自然的である。

さて、こうした欲望についての見方を、18世紀後半の「心理学」における幸福観という形式のもとで捉えと、人間の存在を収束させる思想的傾向につながるものとしてある、という研究が既になされている。R．モジによる「幸福の観念」に関する研究によれば、ルソーの時代において、人間が幸福になるためには、欲望そのものを押し殺し、心がより私有の快楽に満たされるようにするという禁欲的な哲学が、サドなどに典型的にみられるエドニスムの系譜に連なる幸福観と並存していたことがわかる。こうした「存在の縮小」を幸福の条件を見なし思潮的背景にしたがって言えば、『エミール』において、幸福な環境が島の閉鎖として形象化されていることは明らかであると思われる。このような理由で、「島」が問題となる『エミール』の第三編の冒頭部の一節では「欲望を減らしなさい、それは、丁度、あなたが力を増大させることになる」とルソーは述べ、欲望と力の均衡に注意を喚起するのである。かくして、小説『ロビンソン・クルーソー』に描かれるはずの孤島は、外的には判断領域を限定し、内的な欲望を抑制するという目論見としては、十二分なまでに教育的な「島」となることだろう。

しかし、こうした禁欲的な環境は果たして真に実現可能なものだろうか。或いはまた、実際にはこうした環境において人間はどのような心理をもって行動するものだろうか。こうした疑問に答える前に、われわれはまず、「島」のトポスがルソーの歴史、社会哲学の文脈でどのように解釈されるべきかを見ておこう。

第3章 島とルソーの自然状態

このような空間的限定により構成される「島」のトポスは、どのような要素を内包する場になるかをまず見てゆこう。『エミール』においてロビンソンの登場を示したのち、ルソーは次のようにこの小説を紹介している。「ロビンソン・クルーソーは、彼の島においてただ一人で、同胞の助けもなく、あらゆる技術の道具もなく、それでも生存の糧を手に入れて自己保存を果たし、ある種の充足感を体験する」（p.455）のように、ルソーは、ロビンソンに「社会的個人の状態（l'état de l'homme social）」ではなく、
「他のすべての状態を評価する」状態を見出しているのである。他の人間や社会生活に不可欠な事物の不在、欠如によって特微付けられ、「社会状態」には生存していないと解釈されるこの主人公の状態は、社会生活のゼロ度を指すものという資格で、ルソーの社会・歴史哲学の基底にあった「自然状態」を想起させずにおかないだろう。『人間不平等起源論』に述べられた、いわゆる「自然状態」は、次の引用に示されるように、本来、社会に存在するべきものが欠如、不在こそがその本質的定義となっているからである。

Concluons qu'errant dans les forêts sans industrie, sans parole, sans domicile, sans guerre, et sans liaisons, sans nul besoin de ses semblables, comme sans nul désir de leur nuire, peut-être même sans jamais en reconnaître aucun individuellement, l'homme Sauvage sujet à peu de passions, et se suffisant à même, n'avait que les sentiments et les lumières propres à cet état, qu'il ne sentait que ses vrais besoins, ne regardait que ce qu'il croyait avoir intérêt de voir, et que son intelligence ne faisait pas plus de progres.13

結論を下せば、器用でもなく、言葉もなく、住居もなく、戦争もなく関係も結ばず、同胞を少しも必要とせず、同居に危害を加えることを少しも望まず、おそらく同胞のだれかを個人的に労わっていることさえなく、森の中をさまよい歩き、野生人は情緒にかかわることはほとんどなく、自分だけで充足しており、その状態に固有の感情と知識の光しか持たず、自分の真の欲求だけを感じ、みて利益があると思うものしか読めず、その知性は虚栄心と同じようには発達しなかったということになるだろう。

この一節のフランス語原文では、前半部に執拗なまでに繰り返されている「なしに」(sans) という前置詞と、後半部に繰り返される「だけ」(ne... que) という制限的観念の表現は「自然状態」の概念を明白に言い表す文体となっている。すなわち、「自然状態」とは、産業、言語、住居、人間関係などの社会的要素を一切欠いて、自然的欲求という絶対的制限のなかでも自己充足しうる野生人の生活する状態なのである。

この人間における社会性のゼロ度の状態は、『人間不平等起源論』の論理において、仮説的条件的推論を可能にするものであり、現存社会について合理的な演繹を行うう上での、理論的な公理とすらいうべきものである。したがって、『エミール』における、同胞や道具の欠いた「島」という環境に於いて、同様の実験的仮説としての機能があることは明らかである。実際、前に引用した「ロビンソン・クルソースは、彼の島においてただ一人で、同胞の助けもなく、あらゆる技術の道具もなく、それでも生存の糧を手にいて自己保存を果たし、ある種の充足感すら獲得する」という文の文体は、物質が欠如しているにも拘らずその主体は自己保存（conservation）と充足感（bien-être）を獲得するという点で自然状態の結論を極めて類似している。このような仮説に始まって、ルソーは『人間不平等起源論』におけりと同様に、子供の身の回りにある事物を一旦取り除いた後に、その有用性とその起源を考察させようと目論んでいる。『エミール』は孤島のロビンソンについて、「偏見を超越し、事物の真の関係に基づいて判断を秩序付けるもっとも確実な方法は、孤立した人間の地位に身をおき、自分自身に有用かどうかを考察して、この人間が自分です判断するように、すべてについて判断することである。（p.455）」と述べている。

以上のように、『エミール』に援用されるロビンソンの「島」は、ルソーの提起する自然状態と極めて相似的な装置として描定されていることが分かる。とはいえ、こうした方法論的な相似を得ず、このロビンソンの状態と自然状態には、一方が囲まずに孤島に漂着し生活させざるを得ないヨーマッタの「文明人」の視点からみられる状態であり、他方が仮説として想定された自然人が生存しうるような状態であるという原理的な観察があることをわれわれは指摘できるであろう。確かに、ルソー自身が述べているところによれば、エミールは「社会状態に生きる自然人」であり、「無人の場所に放逐される野生人ではなく、都会に住むのに向いた野生人である」(p.483) のだろう。それに対して、ロビンソンは、いわば「自然
40 『エミール』に現れた象徴としてのロビンソンの「島」

状態に追放された社会的人間」なのであり、少なくともエミールがそうであると述べられている「野蛮人（野蛮人）」の存在は、ロビンソンにとって、終結、恐怖の対象である食人種以外のなものでもないものである。こう言ってよければ、ある意味あまりにもリアリスティックなこの小説はルソー的解釈のレベルをはるかに越えて起源のそして絶対的欠如の瞬間に関係している、または迫りその中でいることを示しているのである。すなわち、実際の小説『ロビンソン・クルーソー』の主人公は、充足とは対局にある欠乏感に始終取り憑かれ、理性的思考を冠することではなく、欠如を埋め合わせるための欲望にまかせた言動しか行っていないのではない、ということである。この小説を生徒エミールに与えようとする際に、ルソーはこの問題を等視してはいかなかったのだろうか。そこで、われわれはルソーの引用したロビンソンの「島」を検討する同時に、実際の書物である『ロビンソン・クルーソー』の物語を読むことになろう。

第4章 『エミール』から排除された「がらくた」

『エミール』において、紹介される『ロビンソン・クルーソー』の物語はきわめて簡潔であり、次の数行に要約されている。

この小説は、がらくた（fatras）をみな取り除くと、この島の近くでのロビンソンの難破にはしまぎ、島から彼を連れ出す船の到着で終わりだが、いま問題にしている時期のあいだずっとエミールを楽しませるとともに教えることであろう。（p.455）

ここでわかるように、物語は、島に漂着する契機となる難破に始まり、島からの脱出で終わる筋書きに単純化され、その他の部分は「がらくた」（fatras）として切り捨てられている。また、ある意味で当然のことであろうが『ロビンソン・クルーソー』の第二部、第三部と続く後日談的な続編も全く無視されている。こうして、ルソーによって『ロビンソン・クルーソー』はビアレス的冒険旅行小説から、孤島での生活を疑似体験させるための教育書へと決定的に変貌させられていくのである。しかしながら、ルソーによるこの小説の要約は、その後のロビンソン神話の原型、すなわち、孤島で生活するために職人、発明家、理論家となり合理的、建設計的に労働し自己の所有物を獲得してゆく人物の神話的物語として過不足のない、見事な要約となっているのではないのであるが。

ここで実際の物語『ロビンソン・クルーソー』から切り捨てられた主な点を従来の研究に依拠して挙げてみよう。第一にロビンソンがイングランドを離れ、奴隷貿易などに関わってゆくという孤島への漂着以前の部分や、「野蛮人」フライデーに教育を施し、文明化させるという孤島生活の後半部の見られるような植民地主義者ロビンソンの側面がある。第二に孤島で生活する間に敬虔な信仰心を抱くようになるという、宗教的改心の物語としての側面がある。いずれも、『ロビンソン・クルーソー』を分析するうえで欠かせない要素であるが、ルソーはこれらの問題について一切言及していない。この沈黙の意味に関しては、例えば、ルソーは実際には『ロビンソン・クルーソー』をよく読まなかったのではないかとか、ルソーの時代的な限界性が植民地主義的言説を認識できなかった、という様々な憶測を可能にするだろう。しかし、これらの論証は、今のところはなはだ困難を極めるものであり、われわれは彼までルソーのテクストに実際に書かれたことに基づいてこの小説を読みすすめてゆきたい。

われわれは、ルソーが『エミール』と『不平等起源論』に提示した「欠如」の状態がこの小説においてどの様な現れ方をするのかという問題点に焦点を絞り、孤島に漂着しこれで生活させることを得なくなるロビンソンの内部の心理的問題について述べてゆきたい。というのも、ロビンソンという人格に代表されるヨーロッパ的自我が、孤島に漂着することで空間的に閉じ込められ、不幸や欠如の感覚にさいなまれる際に、その自我に重大な心理的な変形が起こっているのである。
さて、ロビンソンは最初の船出から、孤島に漂着するにいたる航海の出発まで、丁度、8年（1651年9月1日から1659年9月1日）の間、さながらピカレスク小説の主人公のように、様々な場所を船で徘徊する。そこで、彼を突きとめるのは、充分に山師的な野心であり、植民地主義者にしばしば見られるような飽くなき利益の追求心なのである。『ロビンソン・クルーソー』についての従来の研究の多くは、主人公が、自分の獲得した財産の金額を、丁度、金銭出納帳に記載するように遂一報告しているということを指摘している。このことは、ロビンソンの「経済的人間（ホモ・エコノミクス）」もまた当時の「イギリス・プロレタリアの典型」と看なす理由の一つとなっているのである。さて、ここで検討したい問題は、孤島への漂着を契機に、主人公の生活世界そのもののが、「宗教的な改心」などを経て、実際に180度転換したのかということである。すなわち、ロビンソンは、立身出世欲に満たれた人生観を改め、ルソーが解釈するような自然の欲求のみで生活する人間ではなく、いわゆる人生観は、少なくともM.ウェーヴァーが描写するような禁欲主義的なプロテスタンティと変貌しはしないのではないか、という疑念を抱かれてはいるとするがであろう。

ロビンソンは、航海の途中で、嵐にあい、船が難破し、後に漂流してある孤島にたどり着く。しかし、彼にとってこの島は「絶望の島」であり、生活必需品の欠如が精神的にロビンソンを苦しめることになる。

September 30, 1659. I, poor, miserable Robinson Crusoe, being shipwrecked, during a dreadful storm in the offing, came on shore on this dismal unfortunate island, which I called "the Island of Despair", all the rest of the ship's company being drowned, and myself almost dead.

All the rest of the day I spent in affliction myself at the dismal circumstances I was brought to, viz., I had neither food, house, clothes, weapon, or place to fly to, and in despair of any relief, saw nothing but death before me, either that I should be devoured by wild beasts, murdered by savages, or starved to death for want of food. At the approach of night, I slept in a tree for fear of wild creatures, but slept soundly, though it rained all night. (pp.72-73.)（下線部は熊本による）

1659年9月30日。私は哀れでみじみなロビンソン・クルーソーは、おそろしい嵐のため沖合で難破し、この無気味に不適な島にたどり着いた。私はこの島を「絶望の島」と名づけた。船の乗組員はみな溺れ、私も危うく死ぬところだった。

この日一日も、突然自分の身に訪れたこの無気味な境遇をただ悲しむのみであった。私は食物も家も衣類も武器も逃げ場もなく、救われる望みもなく、前途にはただ死があるだけであった。猛獣に食べられで死ぬか、蜜人殺されるか、食べるものがなくて飢死するかいずれかであろう。夜が迫っていたので、私は野営を恐れて樹に登って寝た。雨が夜遅し降っていたが、熟睡できた。

興味深いことに、ここに示したロビンソンの日記の英語の原文は「・・・もない」（neither）ものとして食物、家、衣服、武器などが列挙され、更に身に着けかかる不吉もまた否定的に並べられている文体を持っていることである。この否定的態動の反復的な列挙は、先に引用したルソーの『不平等論』の一節の文章をわれわれに思い出させずにはおかない。

ところが、ルソーの自然人がこうした欠如のなかでも自己充足感を抱くと述べられていたのは全く対照的に、ロビンソンにおける欠如は、眼前にある不安や恐怖にのみ結びつけられている、ということにわれわれは注目しなければならない。それというのも、こうした微候は、難破、漂着という出来事によって、ロビンソンがその心理に異変を来たしたことを意味しているからである。この日記の中で、ロビンソンに不安と恐怖を抱かせる場所に付されている「無気味な」（dismal）という形容詞は、フロイトの「無気味なもの」（das Unheimliche）17についての分析を想起させるだけに、一層、この主体に生じた異変、つまり
自我の分裂を明らかにしているように思われる。

精神分析学的にいえば、無気味さを感じる時とは、主体はその欲望がかつて抑圧されていた状態を、heimliche（親密な）という形容詞にunという抑圧の接頭辞をつけて回帰させているのである。つまり、二重自我（分身）の出現などに伴う「無気味な」感情は、「親密な」（heimliche）ものとそれに抑圧の刻印を打つ「無気味な」（unheimliche）ものが二重に分裂した自我として出現させる。この二重自我的な心理に関しては、後に改めて述べることにするが、上記の記事についていえば、この「無気味なもの」がロビンソンの抱く喪失感と共に表現されているのである。即ち、その喪失感とは単なる対象の欠如ではなく、そこに抑圧された欲望が回帰していることを、対象の各々に「ない」という否定的な、つまり抑圧の音辞をつけることで再認識しているとは考えられないだろう。このことは、以下に述べるように漂着時の出来事が反復的に語られていることからも裏付けられる。つまり、「無気味な」場所とは、ロビンソンにとって、「実際にはなんら新しいものではなく、また、見も知らないものでもなく、心の生活にとっては昔から親しい何ものかであって、ただ抑圧によって破壊されてしまっている」とした場所、換言すれば「一度抑圧を経て、ふたたび戻ってきた慣れ親しがんだ」との場所なのである以上、その場の「無気味さ」を記述するにはこの過程を反復するしかないのである。

さて、島に漂着した直後から、ロビンソンは上記に述べたような病的反復強迫観念を抱き、いくつかの行動を反復的に行っているが、その一つは、日記の告げる到着第一日目の出来事自体を、奇妙なまでに反復的に描写することである。先に引用した日記が、実際には、島に漂着してから約4週間後に書かれたものであり、この日記の執筆に到るまで、船の難破と島への漂着の出来事が、既に後の回想として何ページも先に語られていたのである。上記の日記の内容に相当する、漂着直後の様子は次のように記されていった。

私は、一体どこへかで、次に何をしたら良いかを確かめるために辺りをもうかわした。あまり安心はできないうち、つまり、せっかくの命拾いもまた喜びかもしれぬ、ということがすぐわかった。体はずぶぬれであつたが着替えはなく、元気を付けようにもなおも一つ食べるものも飲むもなかった。前途にはただ頭死のあたっていあった。もしそれでなければ、野獣に食い殺されるのがおちであった。何よりも困ったことは身に欠陥を帯びていてのことであった。これでは、食糧をあらためて狩ることも、また逆に食い殺されそうになっただけにも障を防ぐこともできなかった。私は身に付けているものとしては、ナイフ一本、パイプ一個、煙草入れ一枚、ただそれだけだった。事態の容易ではないのを知て私は不安でしたまらずなかった。そして、しばらくの間、狂人のように私は歩き回った。夜がだいたい追い迫ってくるつれ、もしこの近くに猛獣がいるとすると、はたして自分の運命はどうなるのかと考え、暗い気持ちにとざされていった。猛獣はいつも夜になると獲物を求めて出てくることを私は知っていた。

このとき私が思いついた応急策は、近くにあった炭のような密生した刺の多い樹に昇ることだけだった。私は樹上に座って夜を明し、生存の展望が立たないときも、どんな死方をすることも明日になって考えようだ、と決心した。飲める水を探して樹から200メートルほど入り込み、見つけて大きいに喜んだ。水を飲み、飢えを紛らするために煙草を吸んで、樹のところに戻り、登っていた。眠ったとしても落ちないように場所に苦労して身を構え、護身用に用意するような短い枝を切り取って、私は樹上に一夜の宿をとったのである。極度に疲れていたので、すでに眠り込んだ。こんな状態で、私は夜来に眠ったものではないだろうというほどの眠りだった。そして、こんな場合に経験したことのないような爽快さで目覚めた。 （pp.50-51.）

P. ヒューム及び岩尾龍太郎によれば、この漂着第一日目を報告する記述は、われわれの二つの引用部分を含めた四つ存在しているのだが、それぞれの内容を詳しく見てゆくと聴覚が至る所に見られるというのである。しかし、記述の二つの引用を取り上げた場合、注目すべきは、日記に書かれた「無気味な」という形容詞はここでは用いられず、また、恐怖や不安の表現も少なく、むしろ淡々と事実が記述されていること

（未完）
である。つまり、不安や恐怖、そして特に「無気味さ」は、日記に書くという形を通じて初めて現れてくるのである。この事態を理解するには次のような説明が最も妥当であろう。即ち、孤島へ漂着した際に「無気味な」場所という形容をする「わたし」は、既にこの場所への漂着を一度済ませ、ベントと紙をもって（上記の引用には見当たらない事実）、漂着の体験を反復しているのである。これは、なるほど、上記の引用が小説において最初に記述される漂着体験記であり、しかもそこにおいて、「ナイフ一本、パイプ一個、煙草入れ一個」しか持っていないからと述べられている事実からみて、納得もできる。つまり、ロビンソンは出来事が起こったその日に日記を書いていたわけではなく、事後的に日記をつけていたのであるが、この日付を付された日記は、いつそれを書いたかについては明らかにされないのである。日記を書く「わたし」は、ただこの孤島への漂着という出来事を反復的に記述するために現れる、文字通り「無気味な」存在なのである。

漂着第一目の「欠如」を刻印された記述が、このように「無気味に」反復され、しかもその記述には幾つかの艱難が見出せるという事態からみると（例えば、最初の体験記に記された持ち物の記述が日記では削除されていること、日記では樹上で寝ている時に「夜通し雨が降っていた」という事実が付加されている）ルーソーがこのロビンソンの孤島の記述に読みとったゼロ度の起源の瞬間は、実際の小説においてきわめて特定し難い瞬間であることがわかるだろう。ロビンソンは、その起源を指摘し記述しようとするとときに、なかかしらの心理的バイアスがかかり、精神病理学的な反復強迫観念に陥っていると言えるだろう。そうした病的な反復強迫観念的な行為について記述の顕著なもう一つの例が、次に述べる離破船からの物資の運搬にみられる。

第5章 ロビンソンの反復強迫観念

島へ漂着した時から、日記を書き始める4週間の間には、ロビンソンが、一旦、島にたどり着いた後、生活必需品を求めめて何度も離破し座礁した船と島の間を往復したことについての記述がある。

私は、ひとりの人間が使うものとしては最大の倉庫、しかもあらゆる物資がそっろした倉庫を得た。しかし、私はまだ満足できなかった。船が沈まなくてもあの姿でとどまっている間は、もって来られるものは全て取ってこれなければならないと思った。そこで、毎日、潮が引くと私は船にでかけ、なかかしらのものを運びに行った。

(pp.58-59)

この記述は、まず最初にロビンソンが、文字通りのゼロ度の状態から孤島の生活を始めたのではないかことを明白に示している。ロビンソンの孤島生活は、上記の引用にあるような「あらゆる物資のいっぱい詰まった倉庫」（the biggest magazine of all kinds）を作り上げるところから始まっているのである。しかも、ロビンソンはそれでも「満足できず」、この運搬作業を結局は「12回」も反復することになるのである。

上陸してからもう13日もたっていた。船に行くことも11回に及んだ。その間、人間の二本の手でとにかく運べると思われるものならみな運んだ。いやそれどころではない。もし穏やかな天気さえ続いていたら、正直な話、船をばらばらにしてそっくりもって行ってもかしこれなかった。

(pp.60)

ロビンソンは、運搬の度に「全てのもの」を船から引き出そうとするが、相変わらず「すでにたくさんのものをばら集めていたにもかかわらず、多くのものが欠けている」（I wanted many things, notwithstanding all that I had amassed together）という感じに捉えられるのである。「船をばらばらにしてそっくりもって行くかもしれない」という飽くなき物資への執着心は、ロビンソンの強迫観念を見るに言い表してい
「エミール」に現れた表現としてのロピオンの「島」

4月16日。はしごができ上がったので、そのしごで頂上まで上がってゆき、それをひきあげ、内側へおろした。そこで、私は完全に囲い込まれた（a complete enclosure to me）。

しかし、こうして「安全」を求めて自己を囲い込み、砦を築けば築くほどロピオンは、外部への不安と恐怖が増大してゆくのを感じ次のように述べる。「わたしは以前には苦労して完全な囲い（a perfect enclosure）のうちにもいたが、こんどはにもかかわらずきしだしているような格好で、どんなもののが不意に私が襲ってくるか分からない、という気持がした」（p.104）。こうした外部への恐怖は、孤島の砂浜に他者の足跡を発見した際に、このうえない恐怖と不安を覚え、思考が混乱する記述に最も端的に現れている。
ある日のことであった。正午頃、船の方へ行こうとしていた私は海岸に人間の裸足の足跡をみつけて愕然とし
た。（中略）混乱に満ちきって我を失った男のように、さんざんわけのわからないことを考えたあげく、わた
しは自分の要塞に帰った。（中略）自分の城、というものこの事件以来、私は自分の家を城と呼ぶようになって
いたのだが、そこで周りを走り、なにかに迫われた者のように私は一目散に逃げ込んだ。このとき、かねて
の工夫通りはごとをかけて乗り越えたか、私のいわゆるドアと称する、岩をうがった穴を通してはいったか、覚
えてはいない。その翌朝にも思い出せなかった。どんな伝えたウサギやオオツネにしろ、ことときの私は恐怖
を抱いて隠れ家に逃げ込むことはないだろう。 （pp.152-153）

誰のものともわからない「足跡」が与えた恐怖は、常軌を逸したものであり、ロビンソンはこの出来事の
あと「三日三夜も城からでないで」（p.156）あれこれと妄想に近い思考をおこなうのである。とりあえ
ずの結論は、「自分の足跡ではないか」（p.156）というものであったが、もう一度、現場に戻り大きさを
比べると自分の足よりもはるかに大きいものであることがわかり、また「新たな妄想」（p.157）に陥っ
てしまう。

そのようにしてロビンソンが最終的にした結論は、彼の孤島には自己以外の他者が存在すること、そ
して島の近くのある大陸から「野蛮人」が船でやってきて足跡を残した、というものであった。ロビンソ
ンが抱く外部への恐怖は、かくして実体化されてゆくのであるが、それにしても、彼はそうした「危険」
に対してより一層の自己防衛を行い、彼の「著」を更に強固にすることにのみ執着するのである。

そういうわけで、私がしなければならない唯一のことは、野蛮人がこの島に上陸した場合に備えて、安全な隠
れ家を確保するということだけであった。（pp.158-159）

外郭にいる他者への恐怖とは、彼が足跡を「自分のものではないか」と考えたように、自己と他者との境
界が曖昧であり、畢竟、自我が解体されたまま再構成されていない、ということであろう。そして、この
再構成が果たされるのは、この他者が「野蛮人」＝「食人種」以外のものではなく、自分はこの種のもの
ではないことをロビンソンが理解する瞬間においてである。

足跡を発見した海岸で、ロビンソンは食人が行われたことを示す痕跡、「人間の骨が散らばっている」
（p.163）のを発見したが、彼は抱くのは恐怖と同時に、自分が食人種に生まれなかったという「幸福」感
なのである。

それから我にかえり（recovering myself）、深々とした感動を魂いっぱいに感じ、両眼から涙を流しながら天を仰
いで、自分がこんな恐ろしい人間の仲間にならなくてすむ国に生まれたことを神に感謝した。（p.163）

ロビンソンの「幸福」とは、彼がキリスト教徒であり、ヨーロッパ人以外のものではない、という自己確
認による自我再構成の瞬間に感じられるものではない。或いはまた、こうした「野蛮人」のひとりであ
るフライデーを、「食人の習慣」から矯正し、英語を教育し、キリスト教徒へと改宗させ、銃の使い方を
教え、という一連の植民地主義的な教化、馴致の結果、「もしこの世に完全な幸福（complete happiness）
があるとすれば、まさにフライデーとの交わりこそその幸福である」（p.217）とロビンソンが記述するに
なる。ルソーが『エミール』で述べていたように、ロビンソンがある種の「充足感」を求るとしても、そ
れは、小説においては、ロビンソンが文明の側にあるヨーロッパ人として自我を再構成し、「野蛮」＝「自然
を植民地主義者として支配する瞬間においてではないのである。

かくして、ロビンソンはヨーロッパ的な自己を取り戻すのであるが、その過程において、彼の欲望は、
欠如の刻印された表象、すなわち、「島」にはかつて存在しなかった事物についての「表象の連鎖」とし
て立ち現われていたといえよう。というのも、ロビンソンの表象とは、「イメージや形像、記号によって、
不在の事実あるいは概念を感覚しようとするものであり、初めからあらゆる現実の喪失を、その結果を表示することによって指示しているものというかぎりにおいて、回復しえない欠如を逆理的、連鎖的に追い求める欲望を表すものとなっているからである。そして、問題のそれは、これらの表象が、その後の小説の展開の中で、沈黙する「自然」＝「野蛮人」の代理として言説化され、テクストの「孤島」の上にヨーロッパの社会の飛び地として実現されてしまうという事態なのである。さて、ルソーもまた、『エミール』第三編のなかで、「島」は事物そのもの、そして事物の関係、起源が主題となる領域であると述べている。そこでにおけるゼロからの労働を重視して、子供に事物の連鎖の起源を迫る考察をするよう求めている。

道具から道具へと、子供は常に最初のものへ邁ろうとするだろう。彼は推測ではなにも認めようとはしないだろう。彼は、自分が持っていないような以前の知識を要求するものを学ぶことを拒绝するだろう。もし、パネができるのを見るとき、彼はどのようにしてヤケや瓶から引きだされたかを知ろうとするだろう。築の部品が組み立てられたのを見るとき、どのように樹木が切り出されたかを知ろうとするだろう。彼が仕事をするとき、自分がそれぞれの道具を使うたびに、必ず次のように思うだろう。もし、この道具をもっていななかったら、同じものを作り出すのに、或いはそれなしで済ますために、どのようにすればよいのか。 （p.460）

しかし、ルソーがここで追求しようとする「起源」は、これまでみてきたように『ロビンソン・クルーソー』においては極めて特定しがたい瞬間にしかないのである。P. マシュューイが述べているように、「島にいる人間」という概念装置によって「起源」の神話の追究することとは、ルソーのみならず、18世紀後半の思想を特徴づけるある種のイデオロギーの素材にほかならない。とはいえ、こうした指摘が小説『ロビンソン・クルーソー』の読解からえられるとするならば、そこにルソーの読解があっただることを認めなければならない。『エミール』における教育的「島」は、ロビンソンの孤島を誤って解釈したものに築かれた理論なのである。

ただし、当時のヨーロッパ諸国において、「島」のトポス、さらには教育のための「島」のトポスを受け入れる「期待の地平」が形成されていたという文脈のなかで、ルソーの読解を捉えなければならないということを急いで付けてくわえなければならない。実際に、この小説自体が多くの読者が獲得しただけではなく、亜流ロビンソン小説、ロパンソナードが様々な教育的な粉飾をこうし、ヨーロッパ各地で数多く書かれている。したがって、ルソーの読解の例は、その時代全体の眼に死角があったことを示唆し、彼もそうしたパラダイムを共有していたことを示しているのである。

さて、ルソー自身の問題の範囲内では、この小説の読解が美しくまた興味深い副産物を産んでいることを指摘しておかねばならない。それが、先に述べたロビンソン願望である。

第6章 島に追放された哲学者

ルソーは、自伝において自らの孤独を、しばしば、ロビンソンに疑えた記述を残している。このようなロビンソンへの自己同一願望には、『エミール』に述べられた教育的願望を提起する意図とは異なり、ルソーの個人的な欲望の在り方を見出すことができだろう。このロビンソン願望において、特微的なことは、「島」のトポスが欲望の実現に関する想像的場を提供するということになる。

わたしの楽しみは、小さな島の上に船で上陸し、一、二時間の間散策をし、丘の芝生の上に寝そべることであった。その目的は、この島や周辺を眺める眺めを堪能し、手の届く範囲にある全ての植物を観察し、詳細に分析し、もう一人のロビンソンのように、この小さな島の内に架空の住居をたてることであった。（『告白』p.644）
サン・ピエール島滞在について、このように始まる『告白』の一節の中で、上記のようなロビンソン願望が述べられている。この願望は、更に、次のように「私はサン・ピエール島があまりにも好きになり、そこでの滞在は私が非常にふさわしかったので、全ての願望（desir）をこの島にこめる（inscrire）」（『告白』、p.645）と表現され、「島」のトポスが、あたかも欲望が刻印（inscrire）される場であるかのように転じてしまうことをわれわれに示唆するのである。『告白』や『孤独な散步者の夢想』にみられる、以上のような有名なサン・ピエール島での滞在に関する記述は、それ自体が、ルソーのロビンソン願望の実現と考えることができるだろう。

では、『エミール』において提出された教育的島と、ルソーの個人的なロビンソン願望は無関係なのであろうか。この疑問に答えるには、『エミール』第二編の冒頭に、実は、既に示されていた島での孤独な生活を送る哲学者のイメージについて言及する必要がある。

道具と書物をもって孤島に追放され、そこで残りの日々をひとりで過ごすことを確信しているような哲学者を想像してみよう。彼は、世界の機構とか、引力の法則とか、微分の計算などにもはや頼わされることはないだろう。一冊の書物も開くことなく、その島がどれほど大きくなっても、なんら騒騒することなく、彼の島を最後の片隅にいたってまでは証言できないだろう。（p.429）

この一節は、一見、代理物＝表象を用いる教育を批判する『エミール』第二編の文脈のなかに、具体例として示されたように見える。しかし、この文章に示される「孤島」にひとり住まう哲学者のイメージには、教育的配慮ではなくむしろ、ルソーという哲学者自身のロビンソン願望の表現を見出すと同時に、時代的にはより晩年のサン・ピエール島の滞在を予言している。

周知のようにルソーは、『エミール』執筆の後、亡命を余儀なくされ、サン・ピエール島で植物採集と夢想の日々を送ることになる。この予言的規則とルソーの実人生の関連に見い出せるのは、自らが想定したロビンソン的環境を自己の想像のイメージとしてルソー自身が生きてしまう事態である。この『エミール』の一節は、ルソーにおける『ロビンソン・クルーーマー』の「島」についてのもうひとつの読み方を端的に示している。つまり、「島」というトポスは、ルソーにとって書物の内にしかない自己の願望充足の表象として捉えられている、ということである。

結び

かくして、実際に小説に描かれるロビンソンの「孤島」は、ルソーにとって、現実感のある島ではなく、あくまでも想像的な代理表象であり、書物の中の島という形で存在しているということが言える。したがって、この「島」の小説は、それ自体、害悪をもたらす書物の一つであるとはいえ、ルソーにとっていわば特権的なものであることもわかる。J. スタロバンスキによれば、ルソーは様々な領域で社会の病理を指摘しつつも、極度に達した虚＝害悪（mal）が自ら癒されるための条件を常に内包していることを示唆している。こうした、「病の中の治癒」という論理から見ると、『孤独な散步者の夢想』の「第五の散步」の一節に現れる島での生活を形容する「懐い」（dedomageant）という表現は、ルソー自身にとって「島」での生活が、その社会的生態での「欠損」（dommage）を補完するためのものであり、ルソーの過去における不幸という負債を計数することで癒すものであることを示唆している。この意味で、「島」というトポスは、文字通り、ルソー個人にとっての「癒し」としてあることがわかる。つまり、書物のなかの表象としての「島」は、現実の社会といった直接的に現前するものの代替物、あるいは埋め合わさるういう意味での対価に過ぎないが、それにかしこ既に失われたもの（例えば、それは起源の瞬間でもあり、幸福の状態でもある）を代理表象することによって、回復させる手段なのである。

また、ルソー自身が記述する『夢想』におけるサン・ピエール島での幸福体験は、ロビンソンが孤島に
お互い抱いた自己解体の危機という病への一つの解決を示してはいないだろうか。それは、「島」の自然と一体化をはかることで、自己の内的な欠如感を補うという、ロビンソンとは異なるやり方で自己を（再）構成する可能性を示唆しているのである。

いかなる欠如や享有の感覚も、快楽や苦痛の感覚も、欲望や恐れの感覚もいっさいなく、あるのただ自分が存在するという感覚だけであるような状態、そしてこの存在感だけで魂が全面的に充満出来のような状態、そんな状態がもしあるとすれば、それが続くかぎりは、そういう状態にある人は幸福な人と呼んでいいだろう。幸福と言っても、この世の快楽のうちに見出される幸福のような、不完全で貧弱で相対的な幸福ではなく、十分で完全で充足した幸福、魂のうちに、満たす必要を感じるような欠落感をまったく残さない幸福なのである。（『孤独な散步者の夢』、p.1046。）

ルソーが「島」の生活に見出す「状態」とは、まさにこの「欠如」のない充足感であり、ロビンソンの心理やその「幸福」の在り方に比較すると全く正反対に位置づけられるものである。小説『ロビンソン・クルーーソー』の中にルソーが読み取ったのは、まさにこのような自己充足の「幸福」であったはずである。ルソーのこうした誤読自体は、ある意味で近代人全般に特有といえるロビンソン的病態へのひとつの解毒剤を提供している。そのような意味において、ルソー以降の歴史が行ったのは、それによってルソーがロビンソンの「島」を誤解したところの真意をさらに誤解した、ということではないのだろうか。

L’île comme représentation apparue dans l’Emile de Rousseau
Tetsuya Kumamoto

« Je hais les livres : ils n’apprennent qu’à parler de ce qu’on ne sait Pas ». Cette phrase du 3ème livre de l’Emile illustre bien l’attitude de dénégation de Rousseau envers les livres : donner les livres aux enfants est le « fléau », parce que ce n’est pas une manière ad hoc d’éduquer les enfants par le moyen de représentation. Cependant, l’auteur ne peut s’empêcher de déclamer qu’il ait un livre exceptionnel : le roman Robinson Crusé.

D’après Rousseau, l’essentiel de la lecture de Robinson consiste à faire penser aux enfants comme s’il vivait dans un espace délimité et clos, comme une île déserte où Robinson est apporté. Nous pouvons dire que cet espace délimité de l’île est très proche de l’état de nature présenté dans le Discours sur l’origine de Rousseau : l’état se caractérise par les manques des choses qu’il doit y avoir dans une société moderne. Par conséquent, Rousseau aurait trouvé un degré zéro de la société, un modèle hypothétique-dédactif dans l’île de Robinson ainsi que dans l’état de nature. Or on peut se demander si l’homme civilisé comme Robinson pourra se suffire à lui-même vraiment dans cet état de manque, tandis que l’homme sauvage rousseauiste est censé pouvoir se procurer un bien-être.

En effet, Robinson tombe dans la crise d’auto-déstruction, et par là, il est saisi par la compulsion de répétition, à la suite de son arrivée dans son île déserte. Il raconte à maintes reprises les événements du premier jour où il a été rejetti sur son île, ce qui peut être qualifié d’étrangeté inquiétant ; il repète douze fois le transport de provisions de son navire échoué à l’île, pour établir « le plus grand magasin d’objet de toutes les sortes », mais sans jamais être satisfait. Ces actes répétitifs se décrivent comme s’ils estomaient leur point d’origine, qui n’est toujours pas pour autant déterminé. Et il ne sentira du « bonheur complet » qu’après avoir reconstitué son moi.
comme celui d’être un bon-chrétien, c’est-à-dire, un Européen civilisé, en face des sauvages/cannibales, et être devenu un vrai colonialiste en civilisant un sauvage Vendredi. C’est ainsi que l’état de désir dans Robinson confronté à la différence entre son moi européen et la nature de l’île, consiste à faire une chaîne de représentations marquées par les manques. L’île déserte que Rousseau suppose être un champs clos destiné à rétrécir le désir s’avère être un terrain déclenchant, au contraire, un désir insatiable dans le roman. On ne peut pas ne pas dire, d’un côté, que Rousseau a mal interprété l’île de Robinson, mais de l’autre côté, qu’il partageait seulement un paradigme de son temps, en considération de ce fait qu’il se formait un horizon d’attente pour accepter le roman Robinson Crusoé, diffusé dans les pays européens au XVIIIe siècle.

Il faut ajouter cependant que Rousseau a également proposé une autre lecture de roman, sous-tendue par sa tendance à s’identifier à Robinson. On peut trouver plusieurs mentions de Robinson dans ses autobiographies, où il exprime son attachement pour la vie de Robinson sur son île déserte. Le topos de l’île déserte lui fournit une place imaginaire où il rêve d’habiter au point de dire « inscrire tous ses désirs » dans l’Île de Saint-Pierre. Ce n’est pas un hasard s’il a déjà donné l’exemple d’un philosophe relégué sur une île dans le 3ème livre de l’Émile. Cette supposition n’est autre qu’une image rêvée là où Rousseau projette son souhait de mener une vie isolée. Donc, l’île déserte de Robinson n’implique pour lui que la représentation au sens freudien du terme, à savoir, non pas l’île réelle, mais plutôt une île imaginaire qui n’existe que dans les livres. Ainsi, la représentation de l’île est capable de « dédommager » le malheur que Rousseau a vécu dans son état social et de remédier au mal à lui-même. Et en même temps, cela montre obliquement un « remède dans le mal » à la maladie mentale comme celle dans laquelle l’homme moderne qu’est Robinson est tombé.
注
1 Emile ou de l’Education, in Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau, tome IV, Gallimard, 1980. 本文中の引用でページ数のみを記したものは、全てこの版の原版による。また、訳出するにあたっては、「ルソー全集」第6巻、第7巻、白水社、1982年刊の訳文を参考に翻訳をした。
2 「フロイト＆ラカン事典」、ピエール・コフマン編、佐々木孝次監訳、弘文堂、1997年刊の「否認」の項目を参照した。
3 ルソーの書物への感情は複雑である。例えば、「告白」の第一部冒頭では、亡くなった母親が残した「小説」を、ジャン＝ジャックの祖父イザックが彼に読み聞かせる場面が記されている（Cf. Les Confessions in Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau tome I, Gallimard, p. 8）。その中で、書物は失われた母を代理するものとなり、父と子の間の半ば相持相異なる関係を示唆する対象物となっている。また、やはり「告白」の第一部では、自分の魂をなぜ述べる際に、「金銭」という「代理物」を用いない直接的行为に至るかを正当化しながら、その時に盎然をするのが、やはり書物である。ということ、或いは、まだ幼いジャン＝ジャックが読書に耽溺し、「書物の主人公になり代わっててしまう」という読書経験が述べられている（Cf. Les Confessions, pp.38-39）。書物がいかにしらしの現実の代理＝表象であるならば、ジャン＝ジャックが書物に対して投射するこうした直接的な欲求をどのように捉えるべきなのか。つまり、以上のような意味で、ルソーの書物への嫌悪感ある種の「否認」と考えることができるだろう。Cf. Philippe Lejeune, « Le livre I des Confessions » in Le pacte autobiographique, Seuil, 1975。
4 Cf. Jacques Derrida, De la grammatologie, Édition de Minuit, 1967。
5 Daniel Defoe, Robinson Crusoe, Penguin Books, 1979。以下、「ロビンソン・クルーソー」に関する引用ページは全てこの版による。
6 中川久定、「18世紀フランスの四つの「島」」、『思想』1987年6月号所収、及び、『転倒の島』、『思想』1989年7月号所収、岩波文庫版を参照した。
7 Cf. Jean Starobinski, La transparence et l’obstacle, Gallimard, 1971, p.126。
9 Cf. Georges Fire, Ibid., pp.493-495 ; Gilbert Chirind, L’Amérique et le rêve exotique dans la Littérature française au XVe et au XVIIe siècle, Droz, 1934 (Slatkine Reprints, 2000), pp.346-347。
10 マーチン・グリーン、「ロビンソン・クルーソー」と「書物」、岩尾龍太郎訳、みすず書房、1993年刊を参照した。
14 岩尾龍太郎、「ロビンソンの島」、青土社、1994年刊、pp.214-222を参照せよ。
15 Cf. Pat Rogers, Crusoe’s home, ElCovl. 24, 1974。
16 この問題については、深大久雄が、「社会科学における人々」、岩波新書、1977年などの著作において、ウェーヴァーの「プロテスタント倫理と資本主義の精神」を引きながら力説している。
17 ジグムント・フロイト、高橋義雄他訳、「無気味なもの」、『フロイト著作集』第3巻所収、人文書院、1969年を参照されたい。
18 ジグムント・フロイト、「無気味なもの」、『フロイト全集』第3巻所収、p.347を参照した。
19 前掲書、p.350。
20 ピーター・ヒューム、岩尾龍太郎監訳、「征服の修辞学」、法政大学出版、1995年刊、pp.268-272、及び、岩尾龍太郎、「ロビンソンの巻」pp.92-99を参照した。
21 ピーター・ヒューム、「征服の修辞学」、pp.268-272、及び、岩尾龍太郎、「ロビンソンの巻」、pp.85-99を参照した。
22 『フロイト＆ラカン事典』、項目「表象」、p.315を参照した。
23 Cf. Pierre Macherey, Pour une théorie de la production littéraire, Masspro, 1966, pp.228-229。
24 マーチン・グリーンの前掲書及び岩尾龍太郎の前掲書を参照されたい。
25 「孤独な散歩者の夢想」の「第五の散歩」には、このサン・ピエール島での親在生活がフランス文学史上に残る美しい文体によっって記されている。Cf. Les révirees du promeneur solitaire, Œuvres complètes de Rousseau, tome I, pp.1040-1049。
26 Cf. Jean Starobinski, Le remède dans le mal, Gallimard, 1989。